

私の診療所の最後の日本兵—満蒙開拓青少年義勇軍の元隊員・大巾博幸氏—が貸してくれた資料を読んで

加藤純二（仙台市宮城野区 宮千代加藤内科医院）

高齢の患者さんと診察後、よもやま話をすることがある。患者さん皆が必ず熱が入る話題は苦勞した戦中と敗戦直後の体験だ。小生は昭和 19 年 7 月の生まれなので、敗戦後、世の中がまだ貧しかった頃の記憶が少しあるだけである。ただ母や姉らから大阪空襲の時、火の海の中、逃げ延びた話などは何度も聞かされた。男性の患者さんの中で、特に印象が強かった元兵士の体験談は S 氏の「シベリヤ抑留」と N 氏の「ガ島撤退とインパール作戦従軍」のもので、二人とも長期に診療していたので、体験談をまとめて小冊子にしたことがある。元兵士で最も若い人、つまり終戦当時 20 才の人も今は 90 才のはずで、もう従軍体験を直接に聞くことはないだろうと思っていた。そこに昨年の年末に現れたのが大巾博幸氏であった。

15 才で満州へ

大巾さんは現在 86 才、比較的近くにお住まいで、車を運転し、お元気である。長野県木祖村（木曾町の北方）藪原のご出身で、国民学校高等科 2 年生（当時は尋常科 6 年と高等科 2 年）の時、満蒙開拓青少年義勇軍に応募し、満州に渡った。兵士ではないが兵士としての訓練も受け、あとに述べるように約 10 年、中国各地で八路軍（後の人民解放軍）に加わったり、志願兵として朝鮮戦争にも従軍した方である。

木祖村にいた子供の頃、学校の先生の「満州に行けば、20 町歩（田んぼ 200 枚相当、1 枚＝1 反＝300 坪）の土地が与えられて地主になれる」という言葉に惹かれ、「父母に楽をさせたい」と思ったという。長野県は斜面の狭い畑地が多く、先生の言葉は魅力的だったろう。子供の義勇兵も多かったが、満蒙開拓に一家をあげて海を渡った人々も長野県には多かった。

その方々が敗戦後、大変な苦勞をして日本に戻った体験談を、小生は小中学生の頃、聞く機会が多かった。そんな訳で大巾さんの経歴には大きな関心を持った。大巾さんは卸町の本曾漆器を扱う会社の支店長をされ、今はそれを娘さんご夫婦にゆずり、悠々自適の生活を送っている。そして日中友好協会に所属し、時に頼まれる中国語の通訳をしている。まず手渡されたのは 2 枚の DVD であった。

NHK BS「戦争の証言」と TV 朝日の報道ステーション「終戦時の日本人開拓民」

NHK の方は平成 22 年に放送されたもので、副題は「満蒙開拓青少年義勇軍 第 7 次長野齊藤中隊 隊員と教師達」とある。派遣は第 8 次まで続いた。第 7 次の中隊員 217 名が満州の訓練所に着いたのは昭和 19 年 6 月中旬である。夏には細菌性赤痢のため 11 名が死亡、秋に興安訓練所へ移動した。-30～35 度の厳寒を過ぎ、春の農作業を始めた頃、先生ら大人は召集となった。8 月 9 日の朝、戦車が進む音が聞こえ、ソ連参戦を知った。12 日にはロシア国境地域から婦女子約千名が興安訓練所へ避難してきた。不敗を信じた関東軍は開拓民を置き去りにし、その家族は満州鉄道の列車を優先利用して避難した。隊員らは武器を持って避難民と一緒に逃げた。

この番組は、信濃教育会が中心となって製作した隊員らの体験談と、子供達に満州行きを勧めた、すでに 90 才を越えた先生数人の懺悔談をまとめたものである。歴史の闇に埋

もれさせないでよく作ったものだと思います。ある教師の思い出として、満州で死んだ生徒の父親にあやまりに行った時、その父親が「先生、もういいんです。あいつはそういう運命だったんです」と先生を慰める場面があった。

もう一つの番組は平成 26 年 8 月 15 日に放映された比較的短い番組で、副題は「見捨てられた開拓団 銃をとる少年」で、前半は高齢の女性が開拓団の 570 人が集団自決した時の証言。後半の「銃をとる少年」の方は大巾さんご自身が体験を語っている。中隊隊員 217 名中、戦病死・行方不明が 130 名だったという。これが「五族協和」と「王道楽土」の結末だったのだ。貴重な DVD だと思ったので、何部か複製してお返ししたところ、今度は数冊の本を貸してくれた。

この番組には出てこないが、大巾さんらは一時、避難民とは別の退路をとり、偶然、8 月 14 日の「葛根廟事件」には遭遇しなかった。このロシア軍による日本人避難民 1000 人以上の虐殺事件は、仙台市宮城野区で診療所をしておられた小松誠先生が何度も仙台市医師会報に書いていたので、小生は知っていた。

本を読んで

本は斉藤中隊の仲間の文集や個人の出版物や自家本である。生きて帰った人々の体験談だからか、幸運な体験、特に中国人や朝鮮人に助けられた体験がいくつもあるのが印象に残った。いやな体験で共通するのは先輩からの鉄拳制裁である。これは日本軍に特徴的なものだ。

1) 『興安の友』(昭和 49 年発行)は斉藤中隊の回顧録である。

大巾さんらは 25 日間の泥土を踏んでの逃避行後、9 月 4 日に敗戦を知り、5 日、ソ連軍に投降した。シベリア送りになるところ、子供であるということで免れ、防寒外套を没収されて数カ所の捕虜収容所に別れ住んだ。冬になると-30 度以下の天候の中、強制労働に就いた。発疹チフスと飢えで仲間が次々と死んだ。文集に記された死亡場所を見ると興安街難民収容所とチチハル難民収容所が多い。収容所から外に働きにでると中国人に罵られることもあったが、隊員らを自分の子供のように可愛がり、面倒をみてくれた中国人もいたという。昭和 21 年 8 月に一部の隊員は日本に帰れたが、大巾さんらはすでに食べるために八路軍に入っており、次第に中国語を覚え、中国各地を蒋介石軍と戦って移動した。同様の日本兵の数 3 万人、死者の数は千人という。

八路軍は兵器の装備は劣っていたものの、毛沢東らの指導で、軍紀は守られ、農民を味方にして優勢になっていったという。次いで 25 年 6 月から朝鮮戦争が始まると、大巾さんは志願兵として従軍した。結局、帰国は昭和 30 年であったという。大巾さんは「中国での体験を後悔しない、むしろ誇りに思う。日中不再戦、恒久友好こそ、拓友はじめ、日本の侵略戦争で亡くなった中国人民に対するせめてもの償いだと思う」と書いている。

敗戦時、満州の日本人居留民は約 150 万人いたという。大巾さんは戦後 2 年たったある日、解放軍の軍用で北安から克山という町の供給部分所に行き、仕事の後、列車待ちをしていた。腕に軍用腕章をしていた。薄汚れた中国服を着た女性二人が近くでヒソヒソ話をしていて、それが日本語であると分かり、話かけたところ、「貴方は日本人ですか」と両腕にしがみつかれたという。二人とも大陸花嫁として嫁ぎ、夫は召集され、日本の敗戦で開拓団一行の避難途中、それぞれ二人いた子供が死に、落伍して中国人に助けられ、再婚したという。戦後、初めて日本人に会えたとオンオンと泣き出した。この情景を見た中国

人達は、初めて日本人の解放軍参加者を見て拍手し、駅長が「日本人同志、ご苦労さん」と握手してくれたという。18才の大巾さんは、彼女たちに駅前の食堂で餃子をごちそうして別れたという。記録にも残らない戦争の悲劇は数かぎりなくあったであろう。(『新生中国に生きて』龍華会、平成19年。敗戦後、チチハルで一時期を過ごした仲間の文集。)

2) 『僕は八路軍の少年兵だった』(山口盈文著、1994年)

この本の著者は岐阜県出身でやはり義勇軍に加わった。武器を手にした逃避行は日本人避難民も一緒に、途中、赤ちゃんを抱いた母親から「殺してくれ」と頼まれたり、中国人たちの襲撃に遭ったり、皆でゲートルを繋いで、それにつかまって川を涉ったりした。たまたま遭った日本兵から敗戦を知り、捕虜収容所に入った。そこから別の収容所へ移ることになりまたもや行軍が始まったが、著者は、「赤痢にかかり、五十メートル歩くか歩かないうちに排便しなければならなかったから、隊列からドンドン離れていく。体力は限界にきてしまい、とうとう排便の際に外にはみ出て肛門が元に収まらなくなり、ズボンがはけなくなってしまったので、下半身を丸出しにして杖にすがりながら必死に隊のあとを追って歩いた。…特に苦痛なのは、肛門の周りを飛び交う銀バエどもである。肛門は神経過敏にできているらしく、銀バエにたかられると非常に痛い。…死んでしまった方がいいと思うほどであったが、延吉に就けば、日本に帰れるという執念が、僕をなんとか歩かせてくれたのである。…後ろのほうから足早に誰かが追いかけて来る気配がした。…ヨボ、ヨボという女の声がしたので、振り向いてみると朝鮮族の老女であった。彼女は…僕の哀れな姿を上から下までしげしげと眺めてから、夕闇の中に霞む村のほうを指さし、たどたどしい日本語でヤスミ、ヤスミと言いながら手を引く。…家の中には息子夫婦とおぼしき若い男女がいたが、…釜からタライにお湯を汲んできて、僕がお尻を洗えるようにしてくれた。…肛門をそっと押し上げてみると、するりと元にうまく収まり、今までの苦痛が嘘のように消えていった。…人の情というものを、このときほど有難いと感じたことはない。翌朝、…緑豆の入った粟粥をごちそうになった。…たぶんあのおばあさんの家を出てから2、3日後くらいだったと思うが、僕は何とか延吉にたどり着くことができた、東京城から約150キロの苦しい道のりであった。」

著者は大巾さんと同じく、その後、八路軍に入り、朝鮮戦争にも従軍し、日本の舞鶴港に戻ったのは昭和31年であった。その後、対中国貿易の通訳として活躍されたという。

3) 『謂われなき虜囚半世紀、人とのきずな』蜂谷弥三郎、2001年(速記録)と『戦争で失った青春 地獄を見た男達 囚われの身で、マガダン・シベリアに半世紀を生きて』平成17年、極光の集い、第13号。

蜂谷氏は20才で関東軍に入隊し、23才で結婚し、翌年、渡鮮し、仁川陸軍造兵廠に勤務していた。昭和21年7月、ソ連進駐軍に連行され、ある日本人の虚偽の申告のため裁判の結果、10年の強制労働となり、シベリア送りとなった。この人も収容所で「腰の曲がった中国人の老人」から缶詰の空き缶に入れたお湯とスープとパンをもらい、「地獄で仏に会うような親切」を体験している。収容所で死者が3、4体まとまと馬ソリでゴミ処理場に捨てられたらしい。収容所を転々とし、たまたま理髪店でバリカンが切れなくなったのをガラスの破片で研いだことがキッカケで、理髪店で働くようになった。刑期が終わってもスパイ容疑のため帰国できず、昭和32年、ソ連国籍をえて、6年後、ソ連人女性・クラウディアさんと結婚し、以後は農民として生活した。平成8年、日本に戻っていた妻

子と連絡がとれ、娘さんが訪口し面会した。翌年にクラウディアさんを残して帰国した。

クラウディアさんは幼くして母が死に、継母に乞食の群れに引き渡され、父はレーニン革命(1912年)の頃、連行され、肅正されたいらしい。やさしい乞食の老婆と墓場の横穴で暮らし、食べつなぎ、たまたま墓地に来た水車小屋の主人に拾われて育てられた。その養父も独ソ戦に召集されて帰らず、14才で隣町の写真館に掃除婦として雇われ、僅かな給料を養母に送った。ただ読書の時間があって独学し、共産党少年部に入り、19才でソ連の軍人と結婚した。男児を出産し、国営の食料品倉庫に勤務した。しかし上司の横領事件の濡れ衣をかぶり、10年の強制労働所送りになった。刑を終えてもどると、夫も息子もアルコール中毒になっており、刑務所への出入りを繰り返していた。

以下は蜂谷氏の帰国に際して彼女が書いた同意書である。

「…三十七年間暮らしてまいりました。私達は類似した運命のもとに苦しい日常を送って参り、…今日にいたったのでございます。…妻久子さんの立場を思うとき、かよわい女の身で、幼児を背負い、南北朝鮮の国境を越え祖国帰還に九死に一生の望みを懸けて果たされた渾身の努力と意力に、私は心から尊敬いたしますのでございます。そして一日千秋の思いで、今日の日を待ち続け此の度の再会を間近に控えて居られるのを思う時、…僅かながらの余生を、妻や児に囲まれ孫達と共に暮らす事が当然ですし、…半世紀を生き抜いた妻の久子さん、父の愛情も知らずに育てられた娘久美子さん…晩年の愛情を注ぎ共に暮らす事が出来、それが事実上弥三郎さんの本当の幸せになれば私にとっても此の上なき喜びに存じますし、ロシアの一女性として衷心より願うのでございます。勿論私は天涯の孤独で身よりのない者でございますが、一人暮らしを致す決心を固めたのでございます。…他人の不幸の上に自分の幸福を築き上げる事は人道上決して許されるべき事ではないとの考へは私の固い決心でございますので…」

小生はこの同意書を読んで、ドストエフスキーの『罪と罰』の老婆を殺害し刑務所に入ったラスコーリニコフを待ち続けるソーニャを思い出した。女性の無私な精神の強さが、命令によって殺人者になる人間の弱さを凌駕している。今まで戦争体験、日本人兵士の遺書、殺された側の人々のこと、などなど自分なりに読んできた。そしてこのクラウディアさんの同意書を読んで、自分の読書遍歴は終わったと思った。人は国籍や人種の壁に隔てられて、誤解と憎しみに心を奪われてはならないと思った。

このような戦記の引用を続けていたら、きりが無いと思う。しかし、読んでいて大きなショックを受けた証言を最後に記しておきたい。中国における日本人軍医の訓練の実話で、読売新聞に掲載されたものである。

4)「生体解剖、戦後8年目の後悔」

「当時は当たり前のことだった、思い出すことはつらいんです」1956年6月、山西省太原で開かれた特別軍事法廷。…約40人の戦犯に不起訴の決定が下された。その中の一人、元日本陸軍の軍医、湯浅謙さんに手渡された決定書には、こう記されていた。「わが国の人民に対し様々な罪を犯した。しかしここ数年の日中両国民の友好関係の発展にかんがみ、寛大に処理し、起訴を免じ、ただちに釈放する。」

記事によれば、湯浅さんは赴任して間もない42年3月、現地の学校を病院にした解剖室で若い軍医10人ほどで後ろ手に縛られた二人の中国人男性を麻酔し、盲腸の摘出、腕の切断、血管の縫合などを行った。また軍医部長が、軍医たちを監獄の一室に連れて行っ

た。目隠しをしてしゃがみ込んでいた中国人二人に拳銃を撃ち込んだ。そこで、湯浅さんらは弾丸の摘出手術を行った。太原の捕虜収容所で湯浅さんは自ら告白を始めたが「本心から反省して話した訳じゃない。…命令されてやったとか弁解ばかりしてね。」あとで検察官に一通の告発の手紙を見せられた。「私はお前に殺された〇〇の母親だ」という言葉で始まる深い悲しみを綴っていた。「それを読んでね、本当に、心から、自分のやった行為を悔いた」という。新中国政府は、日本人戦犯 1 千百 9 人に対して、56 年に 45 人を有罪、残る千人余を不起訴とした。湯浅さんは日本に帰り、今も大学などで体験を語り続けていると記されていた。

終わりに

中国共産党はもともと農民愛護の精神が強かった。だが毛沢東が国家主席になると、国家の要職を共産党員が占め、反右派闘争で批判勢力を弾圧した。1958 年からの大躍進政策では数年で 2～5 千万人の餓死者を出し、1965 年からの紅衛兵を扇動した文化大革命では数百万～数千万の死者がでたという。毛沢東の死後、改革開放によって経済が発展したが、共産党幹部の腐敗と貧富の格差が拡大し、深刻な公害も起きている。隣国・中国の社会はこれからも激動するだろう。

(2015/3/15)